

# 佐賀大学ビームライン BL13 における 時間分解光電子分光システムの開発と性能評価

東純平, 山本勇, 小川浩二, 今村真幸, 高橋和敏, 鎌田雅夫

佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター

シンクロトロン光を利用した光電子分光法は、光子エネルギーを自由に選択でき、且つ輝度が高いことにより単色性の高い分光光を得られることから、光電子の平均自由行程が最も短い運動エネルギー領域（～50 eV）での表面敏感測定、表面垂直方向の波数を選択した三次元波数分解測定、内殻準位の高分解能測定、内殻共鳴光電子測定が可能な強力な実験手法である。これらに加えてシンクロトロン光のパルス性とレーザーを組み合わせた時間分解光電子分光法の開発とそれによる光誘起現象の研究も盛んに行われつつある[1]。

我々もまた光誘起現象の研究を行うために佐賀大学ビームライン BL13 において時間分解光電子分光法の開発を行なってきた。これまでに開発した時間分解光電子分光システムは以下の様になっている。繰り返し 500MHz のシンクロトロン光を擬似的な連続光として用いレーザーの繰り返し 10～300kHz に同期して検出器にゲートを掛けるゲート型時間分解光電子分光システム、シンクロトロン光の 1/6 の繰り返し周波数に完全同期した 83.3 MHz のレーザーをポンプ光として用いるポンプープローブ時間分解光電子分光システム、レーザーをポンプ光とプローブ光の両方に用いパルス間隔を光学遅延回路によって制御するレーザー時間分解光電子分光システムの 3 つである。

ポスターではビームライン BL13 に設置されたこれらの時間分解光電子分光システムの性能等、最新の状況について紹介する。

[1] T. Giebel *et al.*, Rev. Sci. Instrum. **74**, 4620 (2003); F. Polack *et al.*, AIP Conf. Proc. **1234**, 185 (2010); N. Bergeard *et al.*, J. Synchrotron Rad. **18**, 245 (2011); Susumu Yamamoto and Iwao Matsuda, J. Phys. Soc. Jpn. **82**, 021003 (2013).



## 佐賀大学ビームラインBL13における 時間分解光電子分光システムの開発と性能評価

東純平, 山本勇, 小川浩二, 今村真幸, 高橋和敏, 鎌田雅夫  
佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター

